深田久弥●山の文学全集

中央アジア探検

80ア

監修
小林秀雄
井上靖
三田幸夫
今西錦司

深田久弥●山の文学全集 XI

中央アジア探検史

朝日新聞社

深田久彌・山の文学全集 XI
中央アジア探検史
全十二巻・第十一配本
一〇〇円

発行　昭和四十九年十月[illegible]日
著者　深田久彌
著作権者　深田志げ子
装幀　原弘
発行者　岡見璋
印刷所　明善印刷株式会社
発行所　朝日新聞社
東京　大阪　北九州　名古屋
© Shigeko Fukada 1974
0395-240171-0042

深田久彌・山の文学全集　XI

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

中央アジア探検史……七
中央アジアとは……九
古代の交通……一二
アレキサンダー大王……一八
張　騫……二六
班　超……四五
法　顕……五一
宋雲と恵生……五七
玄　奘……六四
高仙芝……七五
ジンギスカン……八一
長春真人……九四
カルピニとルブルク……九九

掃馬と馬古思　一〇五
マルコ・ポーロ　一〇九
コルヴィノとオドリコ　一一三
イブン・バトゥータ　一一五
ペゴロッティ　一一九
チムール　一二一
クラヴィホ　一二七
ジェンキンスン　一二七
ベネディクト・ド・ゴエス　一二一
アンドラーデ、グリューベルとドルヴィーユ　一二七
イッポリト・デンデリ　一二七
ユックとガベー　一二七
シュラーギントワイト三兄弟　一二四
プルジェワルスキー　一二六
キンタップ　一三一
ヤングハズバンド　一三一
スタイン　一三八
河口慧海　一四八
一五八

橘瑞超　三七六
スウェン・ヘディン……二八七
はじめに（二八九）　アジアの砂漠を越えて（二九四）　チベットの冒険（三〇八）　トランスヒマラヤ（三一六）　ゴビ砂漠横断（三三〇）　ゴビ砂漠の謎（三三八）　シルクロード（三四五）　戦乱の西域を行く（三五三）　さまよえる湖（三五九）　探検家としてのわが生涯（三六一）
西域の探検家……三六九
「西域」探検家　三七一
コズロフ　三七五
大谷光瑞と隊員たち　三八二
ラティモア　三八八
シトロエン隊とアールト　三九五
タイクマン　四〇三

アトキンソン　四〇五
ランスデル　四一三
ボンヴァロ　四二八
ドローヌ　四三六
フレミング　四四四
スミグノフ　四五二

深田久彌・人と作品（十一）　近藤　信行……四六一
解　題　中馬　敏隆……四六八

中央アジア探検史

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

序説　中央アジアとは

中央アジアという名称は学問的な定義ではない。人々によってその地域の範囲はまちまちである。それを定義することがいかにむずかしいか、リヒトホーフェンがその大著『シナ』の最初の章で述べている。中央アジアの代わりに高地アジアあるいは内陸アジアと呼ぶ人もある。

世界の屋根という言葉はもともとパミール山地をさした。そこはかつてのロシア、中国、イギリス（インド）の三国が境を接した所であり、アジアの分水嶺であった。おそらくそこがアジアの中央らしい感じをヨーロッパ人に与え、高地アジアという呼びかたが生まれたのかもしれない。それがいろいろに範囲を広げて、現在の漠然とした中央アジアになっている。

内陸アジアという名称も近ごろ一般的になっているが、これはあまりに広がりすぎた中央アジアを、もっと狭義に解するために採用した名前のように思われる。内陸アジアというときには、パミール高地を境とする東西両トルキスタンをさす場合が多いようである。

しかしなんといっても中央アジアという言葉には魅力があって、他の名称がまったくこれに代わることはないだろう。その言葉のなかに、夢があり、謎があり、冒険があった。中央アジアと聞いただけで、荒涼とした沙漠や、氷雪をいただいた高山や、羊を追う遊牧の民や、長長と続いたキャラバンの列を思い起こすふうに、わたしたちは習慣づけられてきた。

中央アジアと同様に魅力ある言葉に西域（セイイキまたはサイイキと読む）がある。この言葉がはじめて文献に現れたのは『漢書』で、その列伝第六十六に、西域の範囲が記されている。それによると、東は玉門および陽関、西は葱嶺（パミール）をもって限られている。「南北ニ大山有リ」というのは、天山山脈と崑崙山脈である。東西六千余里、南北千余里、とある。この記述に従えば、西域は、おもにタリム盆地すなわち今の新疆ウイグル自治区をさす。

しかしこの範囲は固執されたわけでなく、この盆地を通過して到達しえられる土地は、すべて西域のなかに含まれたようにみえる。というのは、西域伝のなかには安

息（ペルシャ）、大月氏（オクサス川流域）、罽賓国（カシミール）など、パミール以西の地名も出てくるからである。中国の地誌には西域の名を含んだものが多いが、わけてもその名を高からしめたのは、玄奘の『大唐西域記』であろう。

同じく魅力ある言葉としてシルクロードがあげられる。古くからあった名前ではない。前世紀の後半リヒトホーフェンが名づけ親である。現在シルクロードは東西交通路の異名のようになっているが、リヒトホーフェンが「絹の道」と名づけたのは、絹の輸送の盛んであったアジアの一部の道であった。しかし中国の絹がローマの貴婦人のもとへ運ばれたルートを、「絹の道」と呼んで不都合なわけがない。アルベルト・ヘルマンは古代シルクロードに関する彼の研究で、そのルートを中国からシリアまで延長した。

ヘルマンはその著『シナとシリアとのあいだの古代絹の道』の発端で、こう書いている。「古代交易史上、絹ほど大きな役割を果たした商品は他になかった。それまでたがいにまったくの他人であった二つの文化圏、すなわち中国文化とローマ・ギリシャ文化を親しく触れ合わせたのは絹であった。絹のふるさと中国がこの接触を導いたのである。がそれが実現されたのは、紀元前二世紀の末になってからであった」。

リヒトホーフェンもヘルマンもドイツ人であったから、絹の道をドイツ語でザイデンシュトラーセと呼んだ。それをシルクロードという英語読みにして、その言葉をはやらせたのには、スタインの著作などの影響が大いにあったのだろう。言葉はそれ自身の運命を持つものだが、もし絹の道であったりザイデンシュトラーセであったら、日本でこんなにはやらなかったかもしれない。シルクロードというひびきのいい発音のなかに、人々は何か未知の魅力を感じるようである。日本の出版社や展覧会の担当者が、この文字を用いたがるのもむりはない。

わたしがこれから本書のなかで取り扱おうとする中央アジア、そのルートは広い意味で東西交通路であり、そのヴァリエーション・ルートであるから、それをシルクロードと呼んでもさしつかえないだろう。最初にしるしたように、中央アジアがどの範囲をさすか人々によって異なるが、わたしは東西交通路の通過する地域をすべてそのなかに含める。これを現在の地名で言うと、まずソヴィエト連邦に属する五つの共和国、すなわち一般にソ連領トルキスタンまたは西トルキスタンと呼ばれている

ところの、カザフ、キルギス、タジク、ウズベク、トルクメン。モンゴル人民共和国（外蒙古）。中国に属する三つの自治区、内蒙古、新疆（東トルキスタン）、チベット。中国西部の甘粛、青海、四川、雲南の四省。インド北辺のアッサム、ブータン、シッキム、ネパール、カシミール。パキスタン、アフガニスタン、イラン、イラク、トルコ。以上の広汎な地域を対象とする。

古代の交通

大むかし、広大な中央アジアをはさむ中国とヨーロッパとのあいだには、直接の交流はなかった。双方の文明はそれぞれの立場で発展して、完全に孤立していた。どちらも相手の存在を知らなかった。

しかし人間が生存の必要から、気候の変化にあって新しい適応の土地へ移ったり、食糧を求めてそれが潤沢に得られる地方へ動いて行った原始時代はさておいても、その後、民族と民族とのあいだの戦争による移動や、必需品を交換するための旅行があったことは、当然のことであろう。もし探検という言葉を非常に広い意味にとるならば、そのころすでにそれがあったわけである。

紀元前三千年紀にメソポタミアで世界最古の都市文明を作ったシュメール人は、各地から物資を輸入したが、そのなかにはるか東方のバダクシャンから到来した宝石ラピス・ラズリがあったことは、すでにそのころ、中央

アジアに交易の行われていたことを証する。その見返り品として、ウルの熟練工人によって作られた品物が支払われた。

この時代には東西の交渉を示す記録はない。しかし、地中海から黄河に至るアジアの各地で発見された前史時代の工芸品に相通じるものがある点から推して、すでにその古い時代に中央アジアを貫く交易ルートのあったことが納得できる。

たとえば、青銅は前三千年紀の初めからメソポタミアで鋳造された。殷周銅器は中国で作られたが、その鋳銅技術はメソポタミアから伝わったのであろう。また中国の山西省や甘粛省などから出土した彩陶（彩色土器）とメソポタミア出土の彩陶を比べると、両者の形態や文様に連絡のあることがわかった。もちろん交易ルートの各所に市場があって、文物はリレーによって長い歳月のあいだに伝わって行ったにちがいない。

黄河流域に漢民族が現れたのは前五千年紀という。伝説によれば、三皇五帝があり、その末期に堯、舜、禹の時代があったというが、歴史上確実に王朝と認められるのは殷代（前一六〇〇～一〇二八年とされている）からである。この殷代の遺跡から青銅器や彩陶が発掘された。

中国で四方の様子がわかったのは、漢の武帝の命によって西域に使いした張騫（ちょうけん）の帰国（前一二六年）であったことは、東西交通の発端として有名な話になっている。しかし、朝廷の使節としては張騫が最初だったかもしれないが、それ以前に私人の交通のあったことは言うまでもあるまい。

東西交渉史の高名な学者ヘンリー・ユールは、名著『カセイとカセイへの道』のなかで、中国の最古の記事として、黄帝（伝説時代の五帝の第三番目）の治世に崑崙山脈近辺の西方の国から種々の技術や科学の発明家たちが来たことや、それにつづく堯の時代に越裳（ユエシャン）氏と呼ぶ民族の使節が皇帝のもとへ到着したことなどをあげている。

もっともこれらは、伝説としてよりほか信用できない中国の古い書物から引いたものであるから、確実性はない。また周朝第五代の穆王が、西方を巡遊し（前九八五～九八〇年）、崑崙で西王母に会し、楽しんで帰ることを忘れたという話も残っている。

とにかく張騫以前に、西方へ旅行した人は幾人もいただろう。西方から来た人も少なくなかったにちがいない。禹本記という古い本には、崑崙という高山のことが書い

てある。しかし『史記』列伝では張騫の旅行のことを記した後、作者はこうつけ加えている。崑崙について禹本記のいうところは信用できない。尚書（書經）の禹貢篇の記するところが正確に近い、と。

中央アジアに関する古代の記録は、その信憑性を確かめようとするより、むしろ荒唐無稽な話として見過ごしてしまうのが例であった。しかし近代になって、考古学上の発掘や文献の再検討によって、古記録にも真実性のあることが証せられてきた。

アジアを横切る交易ルートの最古の記録が、「地理学の父」と呼ばれたヘロドトス（前四八四?～四二五年?）によって伝えられている。プロコヌスの人アリステアスが中央アジアへ旅行して、そのことを詩の形で語った。アリステアスは前七世紀の人で、その叙述はいくらか漠然としているが、ヘロドトスはその詩を研究して古代の交易ルートを探った。

ヘロドトスによれば、キャラバンの道はドン川の河口にある交易市場のタナイスから始まる。そこはスキタイ人とサルマート人との境界になっていた。このサルマート人というのはカスピ海の北に広がった広大な不毛の地に住んでいた。その東にブディニという種族がいて、その土地は森林で覆われ、あらゆる種類の木が見られた。

ブディニ族の地を過ぎて七日間、東へ沙漠の旅を続けると、ティサゲテと呼ぶ狩猟民族がいた。同じ地域にイールケという名の住民もいて、やはり狩猟で暮らしていた。

彼らの方法は注目に値する。まず狩人は木に登る。全域が森になっているので待ち伏せするのに都合がよい。犬と馬を連れていて、それが姿勢を低くするために腹ばいできるように訓練してある。狩人は見張りを続け、獲物を見つけると矢を放つ。それから馬に飛び乗って追跡し、犬もあとに続く。シベリアから発掘された金板にこの狩猟の様子が描かれている。

このイールケ族の住んでいるのは、ヴォルガ川の森林地帯からウラル川の流域に来た所であろうとされている。そこは見渡すかぎりの平原で、土壌は厚い。そこを越えると、今度は起伏のある石ころの多い土地になる。この非常に広い土地を通り過ぎると高い山の麓となり、そこにアルジペアンという種族が住んでいた。

彼らは男も女もすべて生まれつき禿頭（はげあたま）で、べちゃんこな鼻と大きな顎を持っていた。誰もこの人々を殺そうとしなかったのは、彼らが神聖なるものと見なされていた

からである。彼らはいかなる武器をも持たなかった。

この山というのはウラル山脈のことで、近代の旅行家の話によると、その頂上に大きな境界の標石が二つ置いてあり、その石にはそれぞれ「ヨーロッパ」と「アジア」と刻んであった。モスクワからウラル山脈を越えてアラル海を過ぎ、フェルガーナの鉄道の終点まで、ただ一つのトンネルもない。

禿頭人の住む地域のさらにかなたにある領域については、ヘロドトスの時代には誰も正確なことを知らなかった。越えることのできない高く嶮しい山がそびえて、進行を妨げていたからである。これが、年じゅう雪をいただき怖ろしい氷河を持ったアルタイ山脈であることにまちがいない。

アリステアスはイセドン族の住む土地までしか行かなかった。彼の旅行詩は『アリマスピア』と名づけられているが、その断片にイセドン人が長い髪をたらして飾りを着けていたことが記されている。このイセドン人はチベット系の古代民族の一つであろうとされている。

イセドン人がアリステアスに語ったところによれば、彼らの住む国の北に境を接して他の種族が住んでいる。その種族は数が多く強力な戦士である。たくさんの馬や羊を持っている。毛深い彼らはみな額にただ一つの眼しか持っていない、と述べている。

この一つ眼の民族はアリマスピと呼ぶ民族であろうとされている。アリマはスキタイ語で「一つ」、スポウは「眼」を意味するという。この民族の東方にグリフィン（鷲の頭、嘴（くちばし）、翼、爪と、獅子の胴体を持つ怪獣）によって守護された黄金があり、アリマスピ人はその黄金を盗んで西方へ売ると言われていた。東洋学者パーシィ・サイクスは、このアリマスピ人を中央アジアの舞台で大きな役割を演じた匈奴と同一であろうと見ている。

以上が西から東へ伸びた触手であるが、東のほうでは西のことをどこまで知っていただろう。その報告の最初は漢の張騫がもたらしたものであって、それは本書の「張騫」の章に書いてある。

古代に、東洋と西洋を一貫した旅行のできなかった理由の一つとして、その中間にいた匈奴の妨害があげられよう。漢朝廷の使節張騫でさえ、西方へおもむく途中、匈奴に捕えられている。匈奴という名前が最初に歴史に現れたのは、紀元前三一八年、中国の戦国時代の諸侯が匈奴を率いて秦を攻撃したときである。その後の群雄割拠の紛乱に乗じて匈奴はしばしば中国本土へ侵入して来

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com